

Ⅲ 男声合唱のための唱歌メドレー「ふるさとの四季」 源田 俊一郎 編曲

「ふるさとの四季」男声合唱版の冒頭に、編曲者の源田俊一郎氏は「日本人の持っている「ふるさと」への思いが、世界の人々に共感されるメッセージとなることを願います」と書いている。

「ふるさとの四季」混声合唱版が同じ編曲者によって世に送り出されてから30数年が経過した。男声合唱版は2002年に「九州フレッシュメンコア」の委嘱で作られ、同合唱団の第一回定期演奏会で演奏された。各曲とも最初の「故郷」を除き、1番2番を中心にして編曲されている。なお、本日は最初の「故郷」から最後の繰り返しまで12曲を連続して演奏する。

故郷 高野 辰之作詩 岡野 貞一作曲

原曲は 1.忘れえぬ「故郷」の自然 2.思い出される故郷の父母・友 3.懐かしいふるさとの自然と人々への望郷の思いで構成されていて、編曲は1. を最初に歌い、2. 3. を最後に歌うようになっている。

この作詩・作曲者のコンビの曲がこの曲集に5曲入っているが、クリスチャンの作曲家岡野貞一の曲は、人の心に深く届く讃美歌のような旋律で、彼の作品が長く愛される一つの理由かも知れない。

春の小川 高野 辰之作詩 林 柳波改作 岡野 貞一作曲

曲は一転して小川の流れを思わせる16分音符のピアノ伴奏で始まる。歌のモデルとなったのは東京代々木公園付近から渋谷方面に向かって流れて居た河骨川と言われる。作詩者の高野辰之は明治42年頃代々木三丁目に住んでいた。

小田急線の代々木八幡駅から参宮橋駅に向かう遊歩道沿いの線路際に「春の小川」の歌碑が建っていて、この碑の歌詞の文字を揮毫したのは高野の娘弘子である。東京オリンピックを機に川は暗渠となり、この川が歌の舞台であることを知る人は少なくなった。

朧月夜 高野 辰之作詩 岡野 貞一作曲

「朧月夜」は、春の夜に月がほのかにかすんでいる情景を示す春の季語である。高野辰之の郷里の長野県では春になると菜種油を絞るためのアブラナの黄色い花で覆われたという。「においあわし」は古くは「色合」を示す意味で、月やアブラナの花が匂うわけではない。

西の空に「入日薄れて」東の空にかかる「夕月」は、三日月より進んだ上弦の月だったろうか？一幅の絵を思わせる日本の風景である。

鯉のぼり 文部省唱歌

曲は編曲者のBravelyの指示に従いアレグレットで勇ましく始まる。男の子の健やかな成長を願って、鯉のぼりを立てる風習は、室町時代に中国（当時明）から上流社会に伝えられ、江戸時代になって庶民の間にも広まったと言われる。「武家はもとより、町民に至るまで、甲冑人形を飾り、紙で鯉の形を作り、竹の先につけて立てた」とされる。

1番は、蕨の波越しに見える鯉のぼり、2番は遠くで見る鯉のぼりである。

茶摘 文部省唱歌

八十八夜前後に摘む一番茶が上等とされていた時代、近郷近在から女性を集めて、歌を歌いながら茶の葉を手で摘み取った。昨今、新茶の時期が早くなり、しかも茶葉は機械で摘み取られることになり、歌のような菅の笠、茜だすきは見られなくなった。因みに未婚女性は茜だすき、既婚女性は黒だすきを身に着けたと言われるが、今では見分けることが出来ない。

1859年の開国以来、横浜港から積み出される茶は輸出品の筆頭に挙げられた。

夏は来ぬ 佐佐木 信綱作詩 小山 作之助作曲

1896年に発表された曲。「夏は来ぬ」は「夏が来た」の意味。「忍び音」は、その年に初めて聞かれるホトトギスの鳴き声を意味する古語で、古今和歌集、枕草子にも登場する。「卯の花」はウツギの花で旧暦の4月（卯月）に開花するので、この名がある。

「玉苗」は「早苗」同様、苗代から田に移し植えられる苗を意味する。農業近代化で山村の「山田」はなくなり、「裳裾を濡らして田植える早乙女」を見ることもなく、ホトトギスの声は聞かれない。元の詩は5番まであり、格調が高い。

われは海の子 文部省唱歌

農村の夏を告げてから、1小節置いて2分の2拍子で堂々と「海」を歌う。この曲の作詞者は不詳と言われて居たが、宮原晃一郎が原作者であることが後日判明した。鹿児島で育った少年の抱負を歌いあげていたが、戦後、7番まであった歌詞は削られ、海育ちの少年の夢は委縮してしまった。東京都多摩霊園に作詩者の自筆による歌詞（一番のみ）が書かれた歌碑が彼の墓所にならんである。

村祭 文部省唱歌

村の祭りは遠雷のような太鼓の音（2度・4度のピアノ伴奏）で始まる。作詩された当時には、年に一度の村祭りにはそれぞれが郷里に帰り、村が総出で祝う「大祭り」が見られた。神社の森にはためく旗、人々の波、響く笛・太鼓の音……。しかし高度経済成長に伴い「村」は姿を変え、過疎化・高齢化が進み、「村祭り」は消えつつある。

紅葉 高野 辰之作詩 岡野 貞一作曲

曲はアレグロの「村祭り」から一転して静かな分散和音のアンダンテに入り、静かに日本の秋を代表する「紅葉」が歌われる。

1番は山のふもとの「裾模様」の紅葉、2番は「川面に散る」紅葉が錦を織るさまが、高音部と低音部の「掛け合い」で表わされている。

冬景色 文部省唱歌

紅葉が散ると冬が来る。曲名は冬景色であるが、初冬（小春日＝旧暦10月）の景色である。1番は、まだ人が起きだしてこない時、水鳥の声のみがする。港の小舟には霜が白い。2番で音楽は転調して、昼時、小春日和、人は麦踏みをしている、カラスが鳴いている、返り咲きの花も咲いている。

雪 文部省唱歌

季節は進んで、「さあ雪だ」。ピアノは、はしゃいだ付点音符を打つ。「あられ」は降り積もることはないが、本格的な冬には雪は積もり、枯れ木には花が咲いたようになる。この曲が作られた時代には、猫は室内で飼い、犬は屋外で飼っていたのだろう。

「雪やこんこ」は「雪よ、来い来い」の意味で「こんこん」と雪が降るのではない。

ここで、1小節（フェルマータ付き）休んで「故郷」に戻り、故郷へ想いを馳せ、アカペラで父母・友への想いを静かに歌う。転調して力強く「志を果たして……」と歌い、再び故郷に想いを馳せ、カノン風に「水は清きふるさと」を歌い、変形和音の後に、主和音に戻って静かに終わる。

